様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０２１

研究課題名（和文）16世紀前半以前の西部・北部ドイツ語圏におけるカンパンおよびロヒールの受容

研究課題名（英文）Study on the Acceptance of Campin and Van der Weyden in northern and western German-speaking countries during the 15th and early 16th centuries

研究代表者
鈴木　伸子（SUZUKI, Nobuko）

東京藝術大学・大学院美術研究科・専門研究員

研究者番号：６０７３２８９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西部・北部ドイツ語圏におけるロベール・カンパンとロヒール・ファン・デル・ウェイデンの受容を考察するものである。16世紀前半以前の西部・北部ドイツ語圏では、初期ネーデルラント絵画が早い時期から流通し、同絵画の影響を強く受けた作品が多数制作され、特異な伝播形態をとった。そこで、初期ネーデルラント絵画を代表する画家である、カンパンとロヒールを中心として取り上げ、当該地域における二人の画家の様式の展開と図像の波及を、具体的な作例に即して分析する。かかる特異な伝播を、さらに社会的背景や宗教的背景に照らして考察し、西部・北部ドイツ語圏における二人の画家の受容の実態を明らかにすることを目指す。

研究成果の概要（英文）：This study was undertaken in order to seek the acceptance of Robert Campin and Rogier van der Weyden in northern and western German-speaking countries. In the 15th and early 16th centuries, the early Netherlandish painting was introduced to this areas and had an important impact on German arts. The study put its focus on diffusion of two artists' style and iconography in north and western German-speaking countries. We discussed this problem with regard to social and religious background.

研究分野：美学・美術史

キーワード：美術史　ネーデルラント　ドイツ語圏　ロベール・カンパン　ロヒール・ファン・デル・ウェイデン

１．研究開始当初の背景

初期ネーデルラント絵画は画家の署名や年代、作品にまつわる史料を欠き、作品の多くが断片的に残されていることから、作品の全体的な図像プログラムや作品が制作された背景等を明らかにすることが困難である。そのため、様式批判による画家の帰属問題に議論が集中し、1990 年代の科学的調査以降、下描きの分析による画家の手の区別といった帰属問題に関心が注がれてきた。しかしながら科学的調査に基づいて帰属問題を解明することは限界を迎え、美術史的な成果に立ち入ることが出来なくなっている。

一方、近年では、初期ネーデルラント絵画が近隣諸国に与えた影響とその受容を分析することで、同絵画を評価し直す試みも行われている。これらの研究は興味深い議論を行い一定の成果をあげているものの、より詳細な議論はなされていない。他方、ネーデルラントで創始され北方に広がった「新しき信仰（Devotio Moderna）」の宗教運動との関係から絵画の機能について議論する試みが近年進められてきたものの、散発的な言及に留まり、不明な点が多く残っている。つまり、後代の諸外国における受容問題と新たな宗教運動の普及が密接に関わるにもかかわらず、等閑視され、初期ネーデルラント絵画の諸外国への伝播の全貌が未だ明らかではない、ということが問題として浮かび上がるのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、初期ネーデルラント絵画を代表する画家で、現在のベルギーのトゥルネーに工房を構えたロベール・カンパン（ca.1375-1444）と、その弟子でブリュッセルの市の画家であった、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（ca.1399/1400-1464）の、15 世紀から 16 世紀前半にかけての西部・北部ドイツ語圏における受容を考察するものである。16 世紀前半以前の西部・北部ドイツ語圏では、初期ネーデルラント絵画が早い時期から流通し、初期ネーデルラント絵画の影響を強く受けた作品が多数制作され、特異な伝播形態をとった。そこで、カンパンとロヒールを中心に取り上げ、当該地域における二人の画家の様式の展開と図像の波及を、具体的な作例に即して分析する。さらに、社会的背景や宗教的背景に照らして考察し、西部・北部ドイツ語圏における二人の画家の受容の実態を明らかにすることを目指す。

なお、本研究はカンパンの包括的な研究である研究代表者の博士論文『ロベール・カンパン研究―周辺作品および 15 世紀から 16 世紀前半のネーデルラント絵画における受容の問題を中心として』（2014 年、東京藝術大学大学院博士後期課程学位論文）の内容を補完・発展させるものである。

３．研究の方法

本研究は二人の画家の受容・伝播形態のカタログ化およびマップ化を目指すものでもあるため、研究方法は以下の手順で行われた。

（1）カタログのデータフォーマットの作成

（2）作品の写真およびデジタル画像の収集

（3）関連データ、文献データの把握と収集

（4）作品所蔵先および研究所における調査研究

（5）データの入力

（6）マップの作成

（7）様式と図像の伝播・普及についての考察

（8）社会的背景・宗教的背景からの考察

４．研究成果

(1) 基本的成果（カタログ・マップ作成）

まず、カンパンとロヒールの、派生作品・追随作品等、画家の影響を示す作品の画像・文献資料を調査収集し本研究の基盤固めを行う。最新の展覧会カタログやドイツ語圏の画家のモノグラフも参照し、関連作品を出来る限り収集・リスト化した。特に示唆的な意味を持つと思われる作品（画家と影響の強い作品等）に関しては現地調査を行う。調査の成果を踏まえファイルメーカーにより目録を作成した。次に、収集した画像資料を主題、図像等に整理し、地域ごとにマッピングし、画家の様式と図像がどのようにドイツ語圏に伝播し普及したのか、収集した文献を参照して分析した。ドイツ語圏の作品が二人の画家とどのような共通点と相違点を持ち、それが何を意味するのかを考察し、ドイツ語圏における展開経路に迫った。

本研究調査により、カンパンとロヒールに関連づけられる作品―派生作品、追随作品、すなわち影響を受けた、あるいは関連がある、と推測される作品―である、油彩、版画、素描などのデータが、関連する文献データおよび画像とともに、デジタルデータとしてカタログ化された。これによって、モノグラフをはじめとする文献のなかで、これまで断片的に掲載・言及されてきたこれらの作品が、改めて、カンパン・ロヒールのカタログのもとに、一つにまとめられた。そして、デジタル形式でカタログ化したことによって、主題や図像、さらに同一モティーフを描いた作品など、様々な角度から容易に検索・参照が可能となった。このようなカタログ化されたデータは、ドイツ語圏における受容を理解するうえで、基礎資料として高い利便性を有している。また、作品の伝播形態を示すマップは、二人の画家の作品の展開経路がより具体的に視覚化されているという点で、有益な資料であると言える。

しかしながら、本研究成果は二人の画家のドイツ語圏における受容を示す作品をカタログ化する作業の一部であり、その第一段階に位置づけられるものである。したがって今後の展望としては、南部・東部ドイツ語圏における受容についても考察の対象とし、同一の形式で調査収集・整理し、カタログおよびマップを完成することが具体的課題である。

本研究成果は、カンパン、ロヒール研究のみならず、15、16 世紀前半のネーデルラント絵画研究全般にとっても重要な基礎研究と位置づけられる。すなわち、先述したように、作品が断片的に残されたネーデルラント絵画研究に新たな評価軸を与えることになると考える。

(2) 新知見

作品の整理・検討、および考察を行う過程において、いくつかの点で、新知見を得ることができた。

第一に、カンパンとロヒールの影響を受けたと推測される作品はライン河畔に位置した都市やハンザ同盟に属する都市に集中し、カンパンやロヒールの原作の派生作品、追随

作品等が比較的早い時期から制作されたことを把握できた。またマッピングの作業を通じて、これまで曖昧なままにされていた二人の画家のドイツ語圏における展開経路に関して、ある程度の新たな指標を得ることができた。この問題は、付属的情報の確認等が必要であるので、いまだ執筆を完了していないが、2016 年中に執筆し、2017 年に刊行したい。

第二に、収集調査した作品画像を検討する過程で、いくつかの作品が、当時フランス、ネーデルラント、ドイツ語圏に急速に展開した清貧のクラリス会と関連する可能性が高い作品があることを把握した。この成果は、論文「プラド美術館所蔵《聖母の婚約》および《受胎告知》をめぐる一考察」、「清貧のクラリス会と祭壇画制作―ロベール・カンパンの周辺作品を中心に―」として、刊行した。また、2016 年中に、美学会東部会例会（成城大学）においても成果の一部を口頭発表する予定である。一連の研究成果は、さらに洗練・発展させ、改めて論文として刊行する予定である（田辺幹之助編集『ヨーロッパ中世美術論集　第三巻　祈念像の美術』竹林舎、2017 年頃刊行予定）。

第三に、カンパンおよびロヒールに関連づけられるいくつかの作品に対して、これまで全く指摘されることのなかった知見を提示することができた。この成果は、« Le Trône de Grâce de Saint-Pétersbourg de l'entourage de Robert Campin dans le contexte de la tradition du diptyque »、「ロベール・カンパン周辺作《サンクトペテルブルクの二連画》についての一考察」として刊行した。

第四に、カタログおよびマッピング、さらに調査研究等の作業を通じて得られた個別的な成果は、今後の研究においてより具体的なかたちにしていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① Nobuko SUZUKI, « Le Trône de Grâce de Saint-Pétersbourg de l'entourage de Robert Campin dans le contexte de la tradition du diptyque » dans A*nnales d'Histoire de l'Art et d'Archéologie*, vol. 36, 2014, pp. 43-60.

② 鈴木伸子「プラド美術館所蔵《聖母の婚約》および《受胎告知》をめぐる一考察」『東京藝術大学美術学部論叢』第 11 号、2015 年、45-53 頁

③ 鈴木伸子「清貧のクラリス会と祭壇画制作―ロベール・カンパンの周辺作品を中心に―」『Aspects of Problems in Western Art History』第 13 号、2015 年、33-44 頁

④ 鈴木伸子「ロベール・カンパン周辺作《サンクトペテルブルクの二連画》についての一考察」『東京藝術大学美術学部論叢』第 12 号、2015 年、5-14 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
①ヴァンサン・ポマレッド「第一章　労働と日々―商人、働く人々、農民」、ブリジット・ガリーニ「第二章　日常生活の寓意―風俗描写を超えて」（鈴木伸子翻訳）、『ルーヴル美

術館展　日常を描く―風俗画にみるヨーロッパ絵画の真髄』、2015 年、83-89 頁、109-112 頁（展覧会カタログ翻訳）

②鈴木伸子、田辺幹之助監修『画家事典』玄光社、2014 年（書籍監修）

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木伸子（SUZUKI, Nobuko）

東京藝術大学・美術学部・大学院専門研究員

研究者番号：60732899

(2)研究分担者

(3)連携研究者